

おかしな日本の難民支援 私が政治家を志した理由

財務副大臣 藤田 幸久

私は一九七五年に慶應義塾

大学文学部哲学科を卒業後、MRA国際親善使節「ソング・オブ・アジア」に参加し、二年間、アジアの青年五〇人とホームステイしながら世界一四カ国を歴訪しました。

その後も世界各国でボランティアに従事しましたが、一九七九年にMRAの指導者の一人で憲政の父・尾崎行雄氏の娘である相馬雪香さんが創設した「難民を助ける会」の創設に参加しました。ここではカンボジア、アフリカ、旧ユーゴスラビアなどの難民支援活動を行いました。

そんな私が一九九六年に衆議院議員となりました。なぜNGO活動の人間が国会に来たのかとよく聞かれます。きっかけをつくってくれたのが

歌手の森進一さんでした。

一九八四年、森さんから「難民支援のためのチャリティーコンサートをやりたいので、プロジェクトを立ち上げてほしい」と会に要請がありました。そこでアフリカのザンビアに飛び、井戸掘りと医療のプロジェクトを始めました。このプロジェクト自体は成功し、その後も「じゃがいもの会」が引き継いでくれました。

ところが、井戸掘りプロジェクトを行った難民キャンプのすぐ外で、日本政府が造った小学校を見て私は啞然としました。水洗トイレと電動黒板がついていたのです。水道がないから井戸掘りをし、電気も整備できていないからボランテニアは発電機を持ちこ

んでいるのにです。水洗トイレと電動黒板などには役に立つはずもない。もっと必要なものがあるはずですよ。外務省に聞いてみたところ「そうしたもの整備されていないと予算が消化できない」という答えが返ってきました。

当時、海外青年協力隊に参加していた私の友人が、包帯の寄付を外務省に要請したら、「包帯は安すぎるから、何十万本寄付しても予算を達成できない」といわれ、支援してもらえないこともありました。こんなばかなことはないと憤慨しました。

大学卒業後、母などからは「なぜそんな収入の不安定なことをしているのだ」と叱られました。が、「社会のためになることをやっている」という自負がありました。でも、政府の支援の実態を見て、自己満足だけではだめだ、政治を変えなければならぬと強く思いました。

大学卒業後、母などからは「なぜそんな収入の不安定なことをしているのだ」と叱られました。が、「社会のためになることをやっている」という自負がありました。でも、政府の支援の実態を見て、自己満足だけではだめだ、政治を変えなければならぬと強く思いました。